

## 巻頭言

## 学会の機能

市瀬 龍太郎

(国立情報学研究所)



昨年、6月に開催された総会において、編集担当理事の任務を終え、引き続き、学会の副会長を務めさせていただいている。まずは、誌面をお借りして、本誌編集委員長のときにお世話になった方々にお礼を申し上げたい。現在は、副会長という立場で、全国大会の委員長をはじめとして、学会全体の運営に関わっている。その立場から、学会に関する三つの点に関して、雑感を述べさせていただきたい。

そもそも、学会とはどのようなものであろうか。学会とは、学術研究の向上発展を図ることを主たる目的として設立された、研究者の集まりとされており、本学会も、「人工知能に関する研究の進展と知識の普及を図り、もって学術・技術ならびに産業・社会の発展に寄与すること」を目的として設立されている<sup>\*1</sup>。本学会は、人工知能の研究に関して同じ志をもつ人々の集まりであると言い換えてもよいだろう。そのため本学会は、同志に向けたサービスをお互いに提供することで成り立っている。論文の査読、評価などがその代表的なものになるかと思うが、少し別の視点から、学会の役割、意義、サービスなどを見ていく。

学会の重要な役割の一つは、新しいアイデアの醸成の促進であろう。近年は、人工知能研究に世界中から注目が集まり、研究が加速度的に進んでいる。そのような中で、専門性に特化した情報を入手する必要性は高まっており、学会はそのような知見を研究者どうしで共有する機能を果たしている。しかし、専門性の積み重ねのみから、世界を一変させるような革新的なアイデアは、なかなか出にくい。幸いに人工知能は、知能という人間の社会生活に密着した技術であり、学会には、工学者ばかりではなく、医療従事者、経済学者、社会学者など幅広い人々が集結している。そのため、学会誌や全国大会、合同研究会などで、自分の専門性から離れた記事、発表を知る機会も多いであろう。そのような機会を活用すると、新たな視点、アイデアを広げていくことができ、新たな技術が生まれてくるだろう。その一方で、運営側から学会の現状を見ると、女性の学会員が少ないなど、ダイバーシティがまだまだ小さいと感ずる<sup>\*2</sup>。ダイバーシティが大きく、インクルーシブな学会は、新たなアイデアを醸成し、イノベーションを創出していくためにも必要であると考えられるため、引き続き対応を考えていきたい。

近年、日本人でも多くの論文を国際誌で発表するなど、研究の国際化が進んできている。研究の支援は、学会の重要な機能であり、人工知能学会では、さまざまな観点から学会員が発信する情報の国際化支援を試みている。論文誌という点では、すでに数年前より、英文論文誌 **New Generation Computing (NGC)** と連携し、学会論文誌に和文で投稿された一部の論文に対して、日本語で査読し、内容をブラッシュアップした後に、**NGC** で再査読を経て掲載するという方式を構築し、学会員向けのサービスとしている。また、全国大会に国際セッションを設定したり、国際シンポジウム **isAI** を開催したりすることなどにより、国際的な情報交換を促進している。このような学会の仕組みは、筆者も含めた学会員のステップアップに有用であろう。また、2021年度の全国大会では、国際セッションに投稿された優秀な論文を **NGC** に推薦して掲載する枠組みをつくるなどの新たな試みも考えており、今後も、学会運営側から学会員の研究の国際化の助けになるような仕組みを考えていきたい。

学会の最も重要な機能の一つに、研究者どうしのつながりをつくることがあるだろう。人とのつながりは、新たなアイデアを創発させるなど、一人ではできないことを可能にさせる大きな力となる。筆者自身、学会の会合を通して知り合った人々と勉強会や研究会をつくるなどの機会が多々あり、人工知能学会から得たものが非常に大きい。しかし、現在のコロナ禍においては、研究者どうしが対面で議論する機会が限られ、この側面からの学会の機能は非常に限定的である。筆者のような世代であれば、研究コミュニティにおいて、ある程度の人とのつながりがすでにできているが、これから人のつながりをつくらなければならない若手の研究者にとって、大きな機会損失となる可能性がある。学会運営側として、そのような人達に向けた対応も考えていきたい。

以上、筆者から見た、学会の機能、サービスなどをいくつか書いてみたが、それぞれの学会員が、いろいろな考えをもって、本学会に参加していると思う。本学会には、まだまだ不十分な点があるかと思うが、学会員の期待に応え、各人の研究を大きく広げるのに貢献するような学会を目指し、今後も運営を考えていきたい。

\*1 参考：市瀬龍太郎：学会の科学における役割，人工知能学会誌，Vol. 26, No. 6, pp. 591-594 (2011)，櫻井 翔ほか：連載「教養知識としてのAI」[第9回]人工知能学会とは，Vol. 36, No. 1, pp. 79-89 (2021)

\*2 参考：特集「ダイバーシティとAI研究コミュニティ」，人工知能，Vol. 35, No. 5, pp. 598-642 (2020)